

## 甲状腺外科草子 111

### 古文復習：千載和歌集の俊成と定家

杉野 圭三

千載和歌集は第七番目の勅撰和歌集、後白河法皇の命で撰者は藤原俊成である。



千載和歌集

藤原俊成

藤原定家

序文は古今和歌集を意識したような文体で、これまでに漏れていた歌を撰んだと記されている。

序：「大和御言の歌はちはやぶる神代より始まりて、楳の葉の名に負ふ宮に弘まれり。玉敷の平の都にしては、延喜のひじりの御世には古今集を選ばれ、中略、過ぎにける方も年久しく、今行く先もはるかにとどまらんため、この集を名づけて千載和歌集といふ。後略」

時は、源平合戦で騒然とする時代であり、寿永2年(1183)、薩摩守平忠度(ただのり)は都落ちの途中、都に戻り藤原俊成に自詠の歌百余首を収めた巻物を託したとされる。

昔、キセル乗車で運賃を誤魔化すことを、薩摩守と言ったものである。忠度(ただのり)に因んだ有名な古典的ジョーク！

「君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうど存じて候ひしに、やがて世の乱れ出で来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の歎きと存じ候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻物のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の陰にても嬉しと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ」(平家物語巻七)

その中の一首を俊成が「詠み人知らず」としてとりあげている。

さぎ波や志賀の都は荒れにしをむかしながらの山ざくらかな (千載和歌集 66、詠み人知らず)



平忠度



平経盛

同様に忠度の異母兄平経盛も「詠み人知らず」として1首入選している。

いかにせむ御垣が原に摘む芹の音(ね)のみ泣けど知る人のなき (千載和歌集 668、詠み人知らず)。「芹を摘む」は叶わぬ恋の意。根と音(ね)をかけている。

撰者ではないものの、息子の藤原定家もこの選定・編集作業に助手として当然参加をしたものと推察する。定家はこの時、源雅行を脂燭で打って除籍されていた。「伝へ聞ク、御前試夜、少将雅行ト侍従定家ト闘諍(トウジョウ)ノ事有り。雅行定家ヲ嘲哂スルノ間、頗(スコブ)ル濫吸(ランスイ)ニ及ビ、仍(モツ)テ定家忿怒ニ堪ヘズ、脂燭ヲ以テ打チ了ンヌ(定家明月記私抄、堀田善衛)」

千載和歌集にもこの事件の記述がある。

今上の御時五節のほど、侍従定家過ちあるさまに聞しめすことありて殿上除かれて侍りける、後略あしたづの雲路まよひし年暮れて霞をさへやへだてはつべき (千載和歌集、1158、入道皇太后宮大夫俊成)、葦辺の鶴は雲の中で道に迷い年も暮れ、春霞さえ隔ててしまうのか。除籍処分の子には春になってもお許しがないのでしょうか？

あしたづは霞を分けて帰るなりまよひし雲路けふや晴るらん (千載和歌集、1159、藤原定長) 葦辺の鶴は春霞を分けて空に帰って行きます。雲の中の道も今日は晴れるでしょう。

勅撰集にこの歌を取り上げられ、定家は穴があれば入りたかったに違いない。可能なら父の目を盗み削除したかっただろう。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024年8月28日